

## 第 50 次南極地域観測隊 夏隊報告

## ○ 第 50 次夏期行動の概要

1. オーストラリア南極局の「オーロラ オーストラリス」を活用し、日豪間で代替輸送を含めた共同観測を実施した。
2. 物資 92 トンの輸送と越冬隊員の引き継ぎ及び交代を実施した。
3. 一般プロジェクト研究観測「極域環境変動と生態系変動に関する研究」を、東京海洋大学「海鷹丸」と連携して、リュツォ・ホルム湾において展開した。
4. 航空機によりセールロンダーネ山地へ入り、一般プロジェクト研究観測「超大陸の成長・分裂機構とマンツルの進化過程の解明」を実施した。
5. 昭和基地夏作業として計画された基地建物・施設の新設や改修工事は可能な限り実施した。

## 1. はじめに

第 50 次南極地域観測隊（小達恒夫隊長以下越冬隊 28 名、夏隊 18 名）では、第 127 回南極地域観測統合推進本部総会（平成 17 年 11 月 11 日に開催）で決定された第 VII 期計画の 3 年次の計画が実施された。夏期行動期間中の観測では、重点プロジェクト研究観測の下で実施される 1 課題、一般プロジェクト研究観測 2 課題、萌芽研究観測 1 課題、モニタリング研究観測 3 課題、定常観測 2 課題が実施された。一方、設営計画では第 VII 期計画に記載された重点項目を中心に実施された。なお、第 49 次隊での観測船「しらせ」退役と、第 51 次隊からの新「しらせ」就航の間で、代替船輸送（オーストラリアの観測船「オーロラ オーストラリス」）による夏期行動となった。

これらの計画の多くは、「オーロラ オーストラリス」船上及び昭和基地での観測であるが、「超大陸の成長・分裂機構とマンツルの進化過程の解明」では、第 49 次隊に引き続き、航空機によりセールロンダーネ山地へ入り観測が実施された。

## 2. 夏期行動経過の概要

第 50 次隊は、「オーロラ オーストラリス」により昭和基地へ向かう隊、航空機によりセールロンダーネ山地へ向かう隊の二つの隊に分かれる。

## 2-1. 「オーロラ オーストラリス」により昭和基地へ向かう隊

## 2-1-1. 往路

観測隊員（越冬隊 28 名、夏隊 12 名）、同行者（1 名）の計 41 名は、平成 20 年 12 月 25 日、成田空港よりオーストラリアに向け出発、翌 26 日シドニー経由で西オーストラリア州パースへ到着した。パースで 2 泊した後、28 日フリーマントル港停泊中の「オーロラ オーストラリス」に乗船した。11 月中旬に日本から輸送した物資を「オーロラ オーストラリス」に搭載するとともに、船上観測の準備や現地購入食料等の積み込みを行った。

「オーロラ オーストラリス」は、12 月 30 日にフリーマントル港を出航した後、定常観測（「海洋物理・化学」）並びにモニタリング観測（「気水圏変動のモニタリング」及び「生態系変動のモニタリング」）を実施しつつ、1 月 5 日には南緯 55 度を通過した。6 日の停船観測終了後、針路を昭和基地のあるリュツォ・ホルム湾へ向け西航を開始した。航路上において、受託課題「漂流型海洋二酸化炭素センサーの投入」を実施した。また、曳航型連続プランクトンサンプラー（CPR）観測が日豪共同で実施された。

1 月 12 日には流氷縁に到達し、同行者課題「南極域における氷海航行に関する研究と氷海域の情報収集」が実施された。翌 13 日に昭和基地まで 56 マイルの位置から、昭和基地第一便が飛び、同日 13:54 (LT)、昭和基地へ着陸した。以後の便と合わせ、同日中に計 30 名が昭和基地入りした。15 日には更に 6 名の隊員が昭和基地入りし、昭和基地における夏期計画を実施した。

## 2-1-2. 昭和基地沖空輸拠点滞在中

昭和基地及び沖合いにおける活動は 1 月 13 日から 2 月 2 日の期間実施された。この間の天候は、中旬は気温が高く、穏やかな晴天の日が多かったが、下旬には 1 月としては 10 年ぶりのブリザードとなり、最大瞬間風速 41.2m/s を記録した。26 日～27 日及び 28 日には外出注意令が発令され、屋外での活動に支障をきたした。月末にかけて低気圧が基地西方で停滞したために天候不良が続く、フライトオペレーションは待機、順延を繰り返し、当初計画より 3 日遅れ、2 月 2 日の昭和基地最終便と

なった。

### 2-1-2-1. 観測計画

船上海洋観測として、一般プロジェクト研究観測「極域環境変動と生態系変動に関する研究」がリュツォ・ホルム湾において展開された。この観測は、東京海洋大学「海鷹丸」を用いた南極観測事業国内外共同観測と連携したもので、「海鷹丸」が開放水面において、「オーロラ オーストラリス」が海氷域で同じ観測を行った。観測に当たっては、天候上の理由から空輸作業が出来なかった1月14日、及び第50次隊の昭和基地への輸送終了後、持ち帰り輸送の見通しがたった1月23-24日に実施された。

萌芽研究観測「南極昭和基地大型大気レーダー計画」では、候補地の積雪状態・影響等の調査を行うとともに、改良型アンテナ輻射器の取り付けを行った。モニタリング研究観測「地殻圏変動のモニタリング」では、大型アンテナ中心取り付け測量や海底圧力計の設置を行った。重点プロジェクト研究観測のサブテーマ「極域の宙空圏-大気圏結合研究」では、第50次越冬計画で開始される下部熱圏探査レーダー観測のための準備を行った。

定常観測では、「測地観測」として、測位座標系の維持・管理が実施された。また、「潮汐観測」では、副標観測を行うとともに潮位観測装置の保守が実施された。

### 2-1-2-2. 設営計画

1月13日の昭和基地第一便以降、ヘリコプターS76（2機）及びAS350B2（1機）による空輸作業が実施された。16日までは、昭和基地から50マイル以上離れた浮氷域に空輸拠点を設けたが、17日朝「オーロラ オーストラリス」は、浮氷域を抜け定着氷縁に到達し、その地点を新たな空輸拠点とした。昭和基地との距離は43マイルとなり、飛行時間を短縮することが出来た。第50次隊の昭和基地への物資輸送（総計91.8トン）は、22日に終えた。この10日の期間、朝から夕刻まで1日を通して飛行作業が実施できたのは、16日～18日及び21日の4日、天候上の理由から飛行作業が1日を通して出来なかったのは14日及び19日の2日、半日中止となったのは15日、20日、22日の3日であった（13日は当初より午後からのオペレーションであった）。

21日からは、第49次観測隊の持ち帰り物資の空輸を昭和基地への輸送と平行して実施した。22日の第50次隊の昭和基地への輸送終了時点で、残りの持ち帰り物資量は半日程度の空輸であり、第49次越冬隊・第50次夏隊及びオーストラリア南極局（AAD）スタッフの収容を含めて、1日程度のヘリコプターオペレーションで完了すると見通しがたったことから、「オーロラ オーストラリス」は海氷域での海洋観測を行うため、一旦空輸拠点を離れた。「オーロラ オーストラリス」が浮氷域へ復帰したのは24日夕刻であったが、天候が悪化したため、昭和基地の北60マイル付近で停滞した。その後、天候上の理由による飛行作業待機は2月1日まで続いた。

天候が回復した2月2日には、第49次観測隊の持ち帰り物資とともに第50次観測隊・AADスタッフが昭和基地で使用した機材の輸送、人員の収容を全て完了した。

昭和基地における設営計画では、第VII期計画に基づき、「「しらせ」後継船就航に伴う輸送システムの整備」として、道路整備工事、ヘリポート待機小屋建設など、「環境保全の推進」として、夏期廃棄物処理、夏期用浄化槽の運用などが行われた。また、「基地建物、車両、諸設備の維持」としては、ケーブルラック改修工事などが、「情報通信システムの整備と活用」として、夏期隊員宿舎の無線LAN運用が実施された。

### 2-1-3. 復路

昭和基地最終便となるヘリコプターは、2月2日、残作業に従事していた第50次夏隊員らを「オーロラ オーストラリス」に収容し、第49次越冬隊員（29名）と第50次夏隊員及び同行者（13名）を乗せ、復路航海の途についた。

3日にはリュツォ・ホルム湾の氷海を離脱し、「気水圏変動のモニタリング」及び「生態系変動のモニタリング」の連続観測を継続した。4日からは定常観測「海洋物理・化学観測」の航走観測が再開された。15日に東経150度線の北上を開始し、定常観測「海洋物理・化学観測」及び「生態系変動のモニタリング」の停船観測が再開された。また、東経150度線に沿って、CPR観測が日豪共同で実施された。

17日には南緯55度を通過した。19日までに全ての観測を終了させ、20日夕刻にはタスマニア州・ホバート港マッコリーワーフNo. 3へ接岸した。翌21日、持ち帰り物資を日本へ輸送する作業を行った。23日に、観測隊は同船を下船し、帰国のためシドニーへ移動した。第49次観測隊越冬隊29

名、第 50 次観測隊夏隊 12 名及び同行者 1 名は、24 日にシドニーから空路帰国した。

## 2-2. 航空機によりセールロンダーネ山地へ向かう隊

### 2-2-1. 日程・行動概要

一般プロジェクト研究観測「超大陸の成長・分裂機構とマントルの進化過程の解明」を実施するセールロンダーネ地学調査隊員 6 名は、平成 20 年 11 月 16 日、成田空港からシンガポール経由で南アフリカケープタウンに向け出発、翌 17 日ケープタウンへ到着した。ケープタウンで 4 泊した後、21 日深夜、ドロンニングモードランド航空網 (DROMLAN) を利用してケープタウンを離陸、6 時間の飛行の後、22 日ノボラザレフスカヤに着陸した。ノボラザレフスカヤ滑走路脇の宿泊所で 1 泊した後、翌 23 日、バスラー機で、東南極セールロンダーネ山地西部に位置するウトシュタイネン (プリンセスエリザベス基地：ベルギー) に到着した。プリンセスエリザベス基地滞在中は、スキードウの整備や物資の整理等、調査旅行の準備を行なった。その後、11 月 29 日から平成 21 年 2 月 4 日までの間、68 日間にわたって野外調査を実施した。野外調査範囲は、セールロンダーネ山地の西部 (南緯 71.5 度~72.5 度, 東経 23 度~25 度) である。調査終了後、プリンセスエリザベス基地で物資の整理等帰国準備をしつつ、ベルギー隊のメンバーと交流を深めた。帰りは往路と逆の径路で 2 月 11 日夜にケープタウンに戻り、シンガポールを経由して 2 月 17 日に全員無事成田空港へ到着した。

### 2-2-2. 物資輸送

日本で調達した南極で使う物資はあらかじめケープタウンへ集積し、ケープタウンからは観測隊と同じ径路 (空路) で南極へ搬入した。現地では、スノーモービル用のソリを用いて移動・運搬した。また、プリンセスエリザベス基地からベースキャンプ往復の輸送は、基地所有の雪上車とソリによって運搬した。往路の物資は 4 トン、復路の物資は 3.7 トン (内、岩石試料は 2.4 トン) であった。

### 2-2-3. 調査概要

調査はすべてテントで寝泊まりしながら実施した。キャンプ地はベースキャンプのほかに 2 ヶ所設置し、それぞれ 2~3 週間滞在した。キャンプ地からは、日帰りで調査し、基本的に全員が同じ調査行動をとったが、一部途中 2 班に分かれての行動もあった。今シーズンは 12 月初~中旬までと 1 月下旬~2 月上旬にかけて悪天候が続いたものの、12 月中旬~1 月中旬は晴天に恵まれ、予定箇所はほぼ調査できた。行動中は、昭和基地との間で定時交信を行った。通信は、基本的に HF で行なったが、電波状況等で HF が使えない場合はイリジウムで交信した。全日程を通じて通信不能な日はなかった。

## 3. 報道・広報活動

第 50 次観測隊の夏期行動中、南極観測事業における科学的成果や活動状況を報道関係者に適宜提供するように努めた。夏期行動期間中、南極本部のプレスリリース 3 件 (「第 50 次南極地域観測隊が海洋観測を開始」、「第 50 次南極地域観測隊が昭和基地に到着」及び「第 49 次南極地域観測隊から第 50 次南極地域観測隊への越冬交代について」) の協力を行った (内 1 件は、越冬交代後の第 50 次越冬隊が行った)。

# 第50次南極地域観測隊(JARE50)



## 日豪共同研究観測



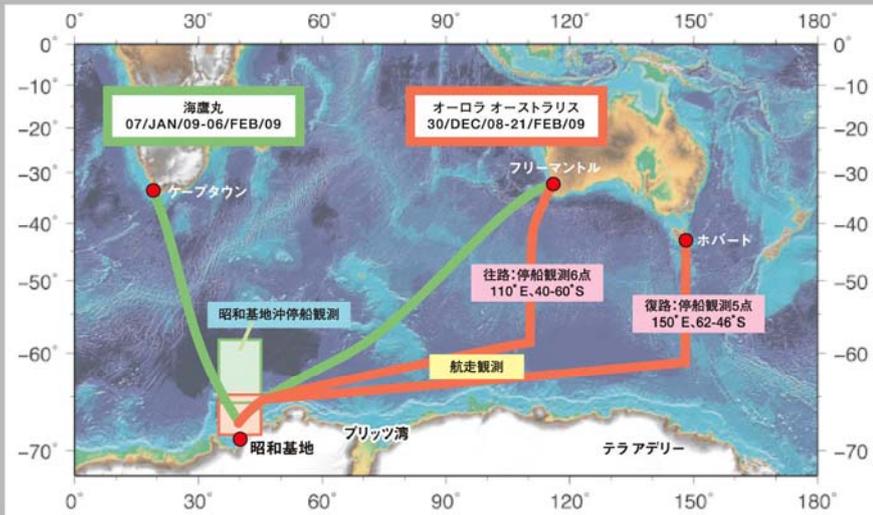
### 極域環境変動と生態系変動に関する研究

南極のプランクトンの生産活動が活発な夏期に「氷海域」と「開放水面域」の同時観測を実施

これまで観測が充分行われていなかった、リュツォ・ホルム湾季節海氷域における生物群集構造を精査

- ・これまでに分布域が不明だった種を明らかにする観測
- ・オーストラリアの観測域(プリッツ湾やアデリー海岸沖)との比較観測

今後、各国の観測結果と比較し、各種海洋生物の南極海全体における分布を明らかにしていく



#### 観測項目

##### 《110°E、150°E上の停船観測》

水深4,000mまでの水温・塩分観測  
深度別採水  
鉛直的なプランクトン採取  
光学観測

##### 《航走観測》

動物プランクトンの表面連続採集  
水温、塩分、植物プランクトン生物量の表面連続測定

##### 《昭和基地沖の停船観測》

水深500mまでの水温・塩分の測定  
深度別採水  
鉛直的なプランクトン採取  
深度別プランクトン採取  
海底圧力計設置



オーロラ オーストラリス  
2009年1月中・下旬に実施



海鷹丸: 開放水面の観測  
2009年1月12-27日に実施

海水縁が予想より南に位置したため、観測分担点を計画よりも南にシフトさせた



深層までの水温・塩分測定  
(海鷹丸)



鉛直プランクトン採集  
(海鷹丸)



NORPACネット観測  
(オーロラ オーストラリス)



これまで分布域が不明だった  
動物プランクトン  
有殻翼足類 *Limacina helicina*  
クリオネの仲間  
(海鷹丸)



NORPACネット観測で  
得られたサンプル  
(オーロラ オーストラリス)



深度別採水 (海鷹丸)



CTD観測(採水)  
(オーロラ オーストラリス)

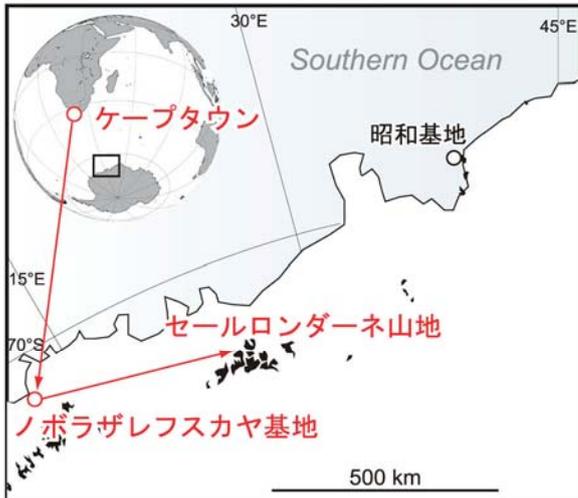
#### 南極海生態系の形成を解明する

IPY(国際極年)の課題・南極海洋生物調査への貢献

# 第50次南極地域観測隊(JARE50)

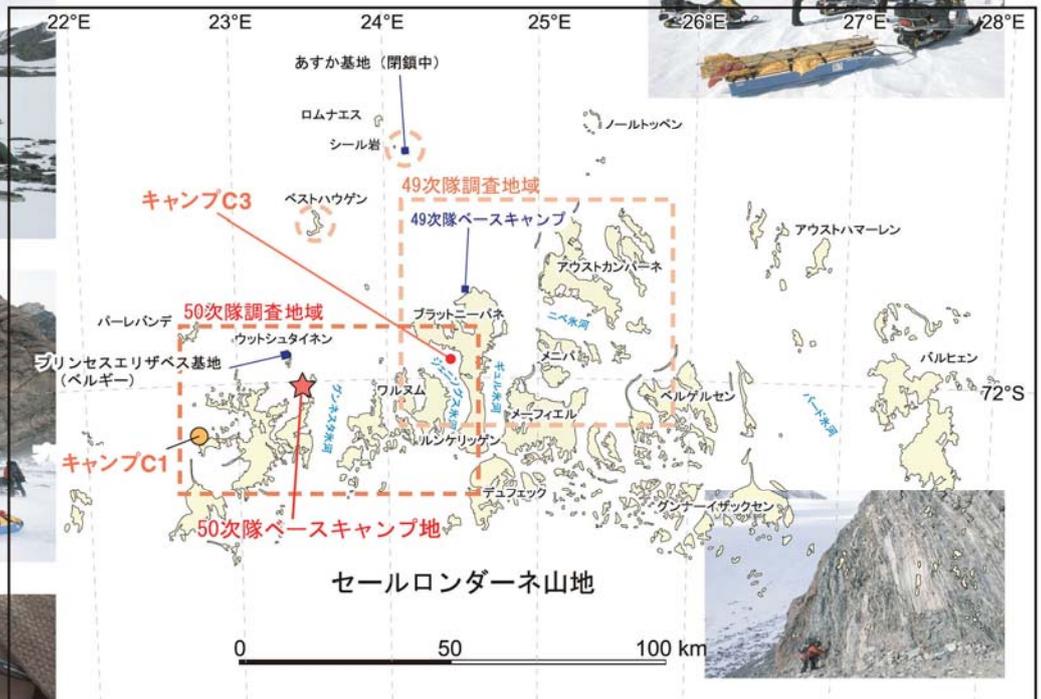
## 超大陸の成長・分裂機構とマントル進化過程の解明 (セールロンダーネ山地地質調査計画)

セールロンダーネ山地において、6名の調査隊員(地質隊員5名+フィールドアシスタント1名)が航空路により現地入りし、スノーモービルとテントを用いた82日間の野外地質調査を実施した



### 行動の概要

2008.11.16	日本出発
2008.11.17	ケープタウン着
2008.11.21	ケープタウン発
2008.11.22	ノボラザレフスカヤ滑走路着
2008.11.23	セールロンダーネ山地(ベルギー基地)着
2008.11.23 - 2009.2.9	ベースキャンプの立ち上げ/地質調査活動
2009.02.10	ノボラザレフスカヤ滑走路着
2009.02.12	ケープタウン着
2009.02.16	ケープタウン発
2009.02.17	日本帰国



- ・セールロンダーネ山地西部地域において野外地質調査を実施
- ・総量2400kgの岩石試料を採取 → 国内に持ち帰り分析・解析

環境に配慮して化石燃料の消費を最小限にとどめるため、調査や生活に必要な電力は全て太陽光発電によりまかなった

大陸形成の際に地球内部でおきていた現象を明らかにし、大陸の離合集散のメカニズムを探る

人類の生存に不可欠な地球規模の環境変動の理解に貢献する

# 第50次南極地域観測隊(JARE50)

## オーロラ オーストラリスによる輸送

定着氷縁から物資約90トンのヘリコプター輸送を実施



フリーマントル(豪)での物資の積み込み。



2009年1月中旬、昭和基地から約74km離れた定着氷縁に進出した。ここから3機のヘリコプターで約90トンの物資を輸送した。



S76(約1トンの物資搭載)2機とS350-B2(約600kg)1機の3機態勢で、1月13日～2月2日の間、193時間のピストン輸送を行った。輸送した主な物資は、越冬隊食料、建築資材などであった。



ダンボール箱等は機内搭載し、長尺物等の大物は吊り下げ輸送とした。

## 資料6

第134回

南極地域観測統合推進本部総会

H21.6.19

### 平成20年度交換科学者報告

1. 期間：平成20年11月30日～平成21年1月10日

2. 日程：

平成20年11月30日 東京（成田空港）発

12月 1日 オークランド経由、クライストチャーチ着

2日 南極センターで装備品受け取り、観測研究打合せ

3日 マクマード基地の天候悪化で出発延期

4日 クライストチャーチ発、マクマード基地着

5日～12日 雪上訓練、各種講習、機材輸送準備、  
並びに観測研究の打合せ

13日 マクマード基地発、アムンセン・スコット南極点基地着

14日～17日 高所順応期間、観測研究打合せ

18日 南極点基地発、内陸前進拠点 AGAP-S 着

19日～21日 高所順応期間、観測機材の組み立て準備

22日～

平成21年 1月

～3日 米国観測点の設置フライト補助、NIPR 機材準備

4日 ドームふじ基地を含む NIPR 2 観測点の設置フライト

5日 残地物資の整理・梱包

6日 内陸前進拠点 AGAP-S 発、マクマード基地着

7日～8日 荷物整理、観測研究打合せ

9日 マクマード基地発、クライストチャーチ着

10日 クライストチャーチ発

10日 オークランド経由、東京（成田空港）着

3. 派遣者：金尾政紀（国立極地研究所・助教）

4. 目的：

「東南極内陸部における広帯域地震計の設置と保守作業」の実施

(IPY Project #147; Antarctica's Gamburtsev Province (AGAP) /GAMSEIS)

5. 内容：

IPY での東南極内陸研究のコア・プロジェクトとして、Gamburtsev 山脈（ドーム A 周辺）を中心とする総合的地球物理調査計画（IPY #147; Antarctica's Gamburtsev Province (AGAP)）が実施されている。その1つのパートである GAMSEIS では、関連各国の協力でドーム A を含む広範囲な領域に広帯域地震計を数十点展開する。これにより、

昭和基地を含む既存のグローバル観測網を補い、南極プレートの構造研究の空間分解能を上げると共に、地球深部研究や氷床内部構造・氷床下湖・地殻構造・地震活動・氷河地震の関連性が重点的に調べられる。

本出張期間中には、アメリカ隊 (United States Antarctic Program; USAP) に参加してマクマード基地、及びアムンセン・スコット南極点基地を経由し、内陸前進拠点 AGAP-S (84.4954S, 77.2243E) をベースに滞在し観測作業を行った。具体的には、アメリカ側の観測点計 24 箇所の設置・保守の補助作業を行うと共に、調査領域の最西部にあたるドーム F 基地 (77.3100S, 39.7000E) 並びにその東南東約 250 km の氷床上に、我が国の観測点を 2 箇所設置した。AGAP-S から各観測点へはツイン・オッター機により日帰りで移動した。

日本南極地域観測隊による東ドロニンギングモードランドにおける取得データと統合した解析を行い、東南極大陸とその下のマントル・大陸氷床の進化過程、並びに温暖化に伴う氷床ダイナミクスの解明に向けた広域研究に貢献する。

## 平成 20 年度外国共同観測報告

1. 期 間：平成 20 年 12 月 22 日～平成 21 年 3 月 23 日
2. 派遣先：バード島基地（英国）
3. 派遣者：高橋晃周（国立極地研究所・准教授）  
坂本健太郎（北海道大学大学院獣医学研究科・助教）
4. 目 的：西南極地域における極域環境変動と生態系変動に関する研究
5. 日 程：  
平成 20 年 12 月 21 日 札幌発 東京着（坂本）  
22 日 東京発 英国（ケンブリッジ）着  
23 日 調査準備・研究打ち合わせ（英国南極調査所）  
24 日 英国ブライズノートン空港発  
25 日 フォークランド着（26 日 出港待機）  
27 日 フォークランド発 観測船乗船  
31 日 英国バード島基地着  
平成 21 年 3 月 13 日 英国バード島基地発 観測船乗船  
19 日 フォークランド着  
20 日 フォークランド発 航空機  
21 日 英国ブライズノートン空港着  
22 日 英国ロンドン（ヒースロー）発  
23 日 東京着  
23 日 札幌着（坂本）

## 6. 内 容：

亜南極サウスジョージア諸島バード島の英国バード島基地周辺において、海鳥・海獣類の生態調査をおこなった。英国とバード島間の移動日程については、天候条件などにより、当初予定していた日程よりも前後した。

バード島で繁殖する主要な海鳥・海獣類であるマカロニペンギン、ジェンツーペンギン、マユグロアホウドリ、およびナンキョクオットセイを対象に野外調査を実施した。これら 4 種の高次捕食動物合計 70 個体に、位置（GPS）、遊泳速度・加速度、画像、などの各種パラメータを記録するデータロガーを取り付け、海上での採餌行動に関するデータを取得した。GPS データロガーの記録からは、ペンギンやオットセイが海洋環境を 3 次元的にどのように利用していたかについて良好なデータが得られている。また同時に糞分析による食性調査、雛数のカウントや雛の体重計測による繁殖成績調査も実施した。今後、これら 4 種の高次捕食動物の採餌場所選択と海洋環境との対応関係の解析、採餌行動の種間比較や、昨年度の外国共同観測で調査をおこなったシグニー島など南極の他地域で得られているデータと比較することで、西南極地域における高次捕食動物の海洋環境変動への応答特性について明らかにしていく予定である。

## 資料 8

第 1 3 4 回

南極地域観測統合推進本部総会

H21. 6. 19

### 第 5 0 次南極地域観測隊越冬隊の現況

門倉昭越冬隊長以下 28 名は、1 月 29 日に昭和基地の運営を第 49 次越冬隊から引き継ぎ、順調に越冬活動が続けている。

#### (天候)

- 2 月：月間を通して晴天が続かず、天候の安定しない日が続いた。20 日から 21 日にかけては A 級ブリザードが記録され、日最大平均風速 47.4 m/s、日最大瞬間風速 54.3 m/s と 2 月としては観測史上 1 位を記録した。
- 3 月：月の前半は曇天の日が続き、吹雪を伴う日も多かった。後半は、晴天が続いた後、曇りの日が多くなった。4 回記録したブリザードのうち 3 回は A 級であった。海氷状態は安定していた。
- 4 月：月間を通して曇りや雪の日が多く、中旬から下旬にかけては風の強い日が多かった。ブリザードは A 級、B 級 1 回ずつ記録し、13 日には外出禁止令が発令された。衛星画像によるとリュツォ・ホルム湾全体の定着氷の領域は縮小する傾向にあったが、昭和基地周辺の海氷状態は安定していた。
- 5 月：高気圧に覆われる日が多く、概ね好天となったが、中旬には、発達した低気圧が接近し、2 度のブリザードとなり、2 回目のブリザードでは、風速、積雪量とも規模が大きく、基地中心部に大量のドリフトが付いた。31 日から太陽の出ない極夜期に入った。昭和基地周辺の海氷状況は安定していた。

#### (基地活動)

越冬交代後、越冬内規・各指針を確認し 50 次隊の現状に即した改訂を行った。2 月 3 日には越冬成立式・福島ケルン慰霊祭を行い、越冬の成功と安全を祈願した。事故防止及び野外行動の開始に備え、野外安全行動訓練・海氷安全講習や消火訓練を実施した。また、3 月上旬、中旬と 2 回にわたり手空き総員参加で島内の一斉清掃を実施した。海氷状態の安定に伴い走行ルートの設定を開始し、4 月にはとっつき岬、向岩までのルート工作が完了し、内陸方面についても、S16 方面のルート整備が行われた。野外行動の本格化に伴い、各隊員が野外行動で不在になる場合のバックアップ体制の検討・確認を行った。基地内の災害監視の観点から、各建物の安全管理点検を行うとともに通信室の TV で一括して各カメラの映像がモニター出来るようにした。

#### (観測部門)

定常観測、モニタリング研究観測、プロジェクト研究観測、萌芽研究観測のいずれも概ね順調に実施されている。2 月下旬より宙空部門のオーロラ光学観測が開始され、灯火管制のもとオーロラ活動が数度観測されている。重点プロジェクト研究観測に関連するものとして、2 月中旬に昭和基地で初めて「極中間圏雲」が観測・撮影された。また、ルート工作と併せて気水圏部門が海氷厚・積雪測定、地圏部門が海氷 GPS 装置の設置・動作試験を行った。4 月にはエアロゾルゾンデの観測を成功裏に行った。気象部門では、北の浦の海氷上に雪尺を設置し観測を開始した。医学研究として、食事調査、心理調査を実施した。また 5 月から宇宙医学との共同調査として、ハイブリッドトレーニングを開始した。

(設営部門)

発電機点検のための電源切替、燃料移送など定期的な業務も含め、各部門とも概ね順調に推移している。2月は夏期作業を継続して実施した。ブリザード後の除雪を含めて、各車両の修理・整備、基地内ネットワークの整備、各施設の修復・補強工事、ライフロープ・標識用旗竿の整備など基地メンテナンスに関わる作業を中心として精力的に行った。安全面では、野外行動に備え、スノーモービル運転講習、雪上車講習、レスキュー訓練、南極安全講習などを実施している。また、4月には推薬庫の整理・廃棄物処理を行い、環境保全物品を収納した。調理部門では、今次隊で試験導入した予備食用冷凍弁当の試食およびアンケート調査を全隊員に実施し、結果を国内に報告した。

(その他)

TV会議システムを利用した情報発信として、国内小中学校などと南極教室を行っている。5月2日には極地研の立川移転記念のイベントで交信を行った。3月より生活諸系の活動が本格的に開始され、映画上映・誕生日会・釣り大会など各種イベントが実施されるようになり、越冬生活に変化と潤いを与えている。また、野菜栽培装置を使った農協系の活動で、レタスやバジル等が定期的に収穫されている。